

(社) 東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 60 号 (2007 年 12 月 26 日)

◆ 定例研究会の記録 ◆

● 第 235 回 定例研究会 (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターとの
共催) 「今よみがえる平家 (平曲) 一物語る声と音」

とき : 2007 年 9 月 22 日 (土)

ところ : キャンパスプラザ京都

公開講座と学会例会を兼ねていることもあり、聴衆の幅広さに配慮してか、一般向けの平家入門講座に始まり、平家研究についての専門的な質疑応答にいたる内容で、それを三時間に凝縮させた盛り沢山の講座であった。

この講座の趣旨は二つある。一つは、平家の豊かさを伝えること、もう一つは、藤井制心氏の平家研究を紹介することである。藤井制心 (1901 年生・1972 年没) 氏は、当日配布されたプログラムによると「平家伝承の危機を感じ、その音楽面にはやくから目を向け、録音や採譜等の音楽的研究に従事してこられた」音楽学者であった。講座では、藤井制心氏の子息である藤井知昭氏が京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターへ寄贈された録音資料が披露された。

講座は、第 1 部平家 (平曲) について、第 2 部平家の研究について、第 3 部平家の価値、面白さ、未来、の三部構成であった。

第 1 部は、平家入門講座といえるような内容である。平家研究の薦田治子氏が、平家伝承の歴史と音楽的な特徴について講演され、司会進行の藤田隆則氏の解説で「宇治川」を鑑賞した。第 2 部は、藤井制心氏の平家研究の紹介である。制心氏が自らの平家研究への取り組み方について語っている昭和 41 年頃の録音を聴いた後、藤井知昭氏が、父制心氏とその研究について講演された。第 3 部は、薦田氏、藤井氏、藤田氏による対談とフロアからの質疑応答で、平家の歴史や音楽的表現について質疑が集中した。

フロアの関心は主に、平家とは何かにあったと思われるが、報告者は藤井制心氏の平家研究が非常に興味深かったため、以下、制心氏の平家研究に焦点をあてて報告した

い。

藤井制心氏の採譜は、平家正節を土台とし、これに井野川検校、三品検校、土居崎検校の演奏を参考にして作成され、検校たちが認めるまで修正が加えられたという。修正にあたって、視覚障害者である検校たちのために、制心氏が採譜をピアノやヴァイオリンで演奏して聴かせ、その音を手がかりに検校たちが是非を合議していたらしい。制心氏によると、苦労したのは、音の長短や高低が検校によって違うことで、知昭氏によると、そのために検校たちが、一つの音で三時間も議論をすることもあったという。制心氏の採譜作成作業は、彼自身がいうように、まさに「人間を通して聴き、人間を通して書く」行為であったといえるだろう。

こうして完成した採譜は、規範譜と記述譜が混合したようなものである。報告者は、採譜を眺めながら、検校たちの「宇治川」を聴き比べていたが、どの演奏も採譜と微妙に異なる。採譜が規範譜ならば当然のことである。しかし、採譜には、記述譜のように所要時間が書かれており、特定の録音に基づいているように思われる。ところが、採譜に書かれている所要時間は、どの検校の録音の演奏時間とも異なるし、三人の演奏の平均時間でもなさそうである。この所要時間の根拠はどこにあるか不明である。

藤井制心氏の採譜は、採譜としては多少の疑問があるものの、三人の検校が考える平家のあるべき姿の視覚的記録としては貴重である。この採譜を平家の伝承を支えてきた三人の検校の総意としてみれば、平家の伝承史において再評価ができるのではないだろうか。

最後に、フロアーは、一般の方々がほとんどで、会場がほぼ一杯になるほどの盛況であった。京都の方々の平家に対する関心の高さに驚かされた。

(島添貴美子 記)

●第236回 定例研究会

「北米における『民族音楽学』の現在：制度、実態、イデオロギー」

とき：2007年12月9日（日）

ところ：国立民族学博物館

「北米の民族音楽学」に焦点をあてた例会が、初めての試みであるかどうかはわからないが、めずらしいテーマであったためか、遠来の会員を含めた、多数の参加者を得ることができた会となった。

冒頭に、司会の寺田吉孝氏より趣旨説明がおこなわれた。北米における民族音楽学は、日本においては、それに関心がある人と、それにまったく関心がない人との

二分割されるのが実態である。しかしながら、今後とも大きな影響力をもつことは確かであり、北米の民族音楽学とのかかわりで日本の音楽学の未来の位置づけを考えることも、これからは重要性をましていくのではないか、といった見とおしが示された。

発表順序として、まずは、北米において、民族音楽学がどのように教えられているか、という点をめぐって、日本の雅楽を「教」えにいかれた経験者として寺内直子氏。つづいて、米国で民族音楽学のプログラムを「学」んで帰国された早稲田みな子氏と寺田吉孝氏が、それぞれの経験を中心に報告された。最後に、総括の立場から、我が国の民族音楽学では早い時期に北米で学ばれた、いわば先達である山口修氏からのコメントを得た。

最初は寺内直子氏「アメリカにおける「日本音楽」の発信：アカデミックな場における」。氏は、ニューヨークのコロンビア大学に、日本中世史研究者（バーバラ・ルーシュ氏）からの依頼をうけて渡米し、同大学にて雅楽の実習を中心とするクラスを担当する仕事をおこなってこられた。寺内氏はかつて、西海岸の大学（カリフォルニア大学ロサンジェルス校）でも、同じように雅楽のクラスをもつ経験をされた。カリフォルニア大学は、40年もつづく歴史のあるプログラムを持つ。氏の仕事は、その伝統をそのまま維持継承することが主であった。

ところが、コロンビア大学では、何もないゼロからの出発である。そもそもの依頼は、東アジア研究のセクションからであったが、音楽アンサンブルの実践ということで、クラスそのものは、東アジアの専攻のコースとしてではなく、音楽学部の中で立ち上げることになった。しかしながら、とうの音楽学部は、どちらかといえば、日本や東アジアの音楽に対するなじみがほとんどない学部である。そこで氏の仕事の中心は、このプログラムを継続的に持続するための仕事、つまり、大学の近隣のネットワーク作り等に大きなウエイトが置かれることとなった。

この過程においての、様々な困難について説明があった。たとえば、現地で日本の音楽の発信をしようとしても、「いわゆるかしこまった現代音楽、伝統音楽では集客ができない」というのが、現地の音楽関係者たちの共通認識であったそうである。また、学生たちも、雅楽にふれるのに、アジアの一伝統にすぎないものとして、いわばカタログ的にふれるだけで満足する場合が多い、という指摘もなされた。その経験をふまえて寺内氏は、日本の雅楽が将来、しっかりと「制度化」されてコロンビア大学の中に根付くとすれば、それは、音楽研究の文脈であるよりもむしろ、東アジア研究という文脈の中であらうと述べられた。

つづいて、早稲田みな子氏は「21世紀アメリカの大学における民族音楽学」

と題して、自らが経験されたインディアナ大学ブルーミントン校での経験を、インターネットにでている現在のプログラムと比較・対照しながら、話された。

インディアナ大学での民族音楽学の歴史が簡単に説明された。評者にとって面白かったのは、民族音楽学の講座が、George Herzog や George List 以来の古い伝統を持ちながらも、当初より近年まで、フォークロア学部(Folklore Department)の下位に置かれていたという点である (フォークロア学部がフォークロアと民族音楽学学部(Department of Folklore and Ethnomusicology)に変わったのは 2000 年だそうだ)。教育の基本的な理念としては、「ベルリン学派的音楽分析的手法と、アメリカ人類学の民族誌的、フィールド観察重視のアプローチを統合」したところに特色がある。また、Alan Merriam の存在もあってか「人類学的なアプローチ」の色合いが強く、それが現在にも基本的な線として継承されているようだ。

さらに特徴的なのは「分析手法、理論、方法論の強調」が、教育プログラム上でも徹底している点である。たとえば修士であれば、フィールドワーク論、学説史、採譜と分析、等といった授業がある。それは教育の基本理念と一致したプログラムであると思われ、評者には、うらやましいシステムと感じられた。

また、講座のスタッフには、アフリカ、アフリカ系アメリカの音楽を研究する教員が多いということも触れられた。このことは、インディアナ大学の民族音楽学が、長年、フォークロア学部の中にあつたこととも関係しているのであろうか。

さて、氏が博士課程をおえられたのは、中西部のインディアナではなく、西海岸のカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校 (UCSB) である。インディアナとどこが違うかに焦点をあてながら、プログラムの紹介が簡単におこなわれた。要は、インディアナとはちがって、諸民族の音楽の実習コースがたくさん用意されているという点であった。また、コンサートやフォーラムなど、学外の人もまじえてイベントが多彩に展開されていること等、くわしく紹介された。結局のところ、日本で最近やっと思われるようになってきたアウトリーチのような活動が、博士課程になるとプログラムとして用意されている、ということであろう。

最後に、現在全米的に展開されているデジタルアーカイブ(Ethnomusicological Video for Instruction and Analysis)の案内、登録システムについて紹介があつた。90 年代に留学された直近の先達として、後進に夢を与えてくれる報告であつたと思う。

最後に、寺田吉孝氏「ワシントン大学における民族音楽学」。氏は 80 年代に留学された。そしてその当時のワシントン大学のカリキュラムと、現在、ウェブで見ることのできるものを比べても、あまり変化はないと指摘されたが、一方で、ス

スタッフが誰であるかによって教育方針は、大きく変わりうることも指摘された。

ワシントン大学民族音楽学科での教育の大きな柱は 4 つある。1 番目が「音楽の民族誌」である。これは学部生に対して、世界のさまざまな音楽文化を概説するものであるが、院生がそれを繰り返してとる際には、さらに該当する地域についての主要文献の講読が加えられることになっている、という授業の運営構造についての説明があった。2 つ目は、「理論と方法」である。寺田氏も早稲田氏同様、この授業がとても役にたったと述べられた。内容として、フィールドワークの方法と実習、採譜と分析など、課題をこなしながら議論を重ねていくスタイルの授業だったそうである。採譜と分析の授業等で苦労された経験談には重みを感じられた。評者は感心してしまう。発表者に対してだけでなく、こういうプログラムを作りあげた北米に対しても、である。3 つ目が「音楽実習」である。もちろん、「二重音楽性」という考え方にもとづいた、世界の音楽文化の実習である。しかし、ワシントン大学の特徴は、「音楽伝承の多様性を体験することに重点」がおかれている点にあるそうだ。つまり「演奏家の養成が目的ではない」そうである。だから「二重」ではなく「多重」志向であろう。

4 つ目の「通領域的研究」は、時代を反映して、氏が学ばれた 80 年代とは変わっている点が指摘された。たとえば「西洋音楽史」等が、現在では必ずしも必修ではなくなっているという点、女性学等の領域があらたに大きくなってきていること、等の変化である。

また 90 年代におきた変化としては、音楽学部ではなく、人類学部の方にも、新たに民族音楽学専攻のプログラムが、並行して設置されたことが指摘された。これはもしかすると、音楽学部自体が、土着化していることかもしれない、と評者は感じた。つまり自分の伝統（西洋古典やジャズ）に特化していこうとする動きが、民族音楽学を人類学の方においやる動きを生み出しているのかもしれない。人類学の方でも音楽への関心がすくなくないから、これを相思相愛の嫁／婿入りであると言えなくもないのだが……。

寺田氏の報告ではつづいて、地域社会とのつながりという点が強調された。大学院生は、ラジオ番組、コンサート等への参加に加えて、各エスニック・コミュニティとの協力体制の維持という実践的な場に参加することになるそうだ（早稲田氏が UCSB のプログラムについてふれられたのと同種の実践である）。いわゆる応用音楽的な実践である。最後に、大学院生のフィールド録音等のアーカイブについても、徹底した管理と、資源の共有化が行われていることが説明された。

休憩をはさんで、山口修氏がコメントをした。山口氏は、60 年代にハワイ大学

で修士号をとっておられる。さらにウェスリアン大学に短期間所属された時の経験を枕の話とされた。本題では、21世紀の北米の民族音楽学を考えていく上での大きな枠組みとして、「西洋／非西洋」「教える／学ぶ」「descriptive / thematic」という三つの二分法を提示された。この二分法をめぐってさらに議論をすすめてほしいとの提案であった。しかし、評者には、どうも枠組みが大きすぎて、なんでもかんでも入ってしまい、話を拡散させてしまうかのように感じられた。

二分法の提示の後、付け加えられてされた話は「アメリカ的なやり方の善し悪し」という話であった。これは、何か恐ろしく、妙に実感がこもって迫力がある話だった。要するに、アメリカは、お金をたくさんつかい、留学生をどんどん呼び、そのあげくに、世界のいろいろな音楽文化をだめにしている。たとえば、現地の貴重な音楽家を現地から奪い取ってしまった例が、多くあるのではないか。簡単にいえばそういう話であったのだが、ひょっとしてアメリカは、日本の民族音楽学者らのあるべき進歩と展開までも、奪い取ってしまっていたということなのだろうか。だとすれば、たしかに恐ろしい。

このコメントに同期するかたちで、早稲田氏も、北米の民族音楽学が、国際学会などのシーンにおいて、アメリカ流の論文の書き方を世界に押し付けることになりかねない、という現状を指摘された。そして、音楽の相対化だけでなく、民族音楽学の相対化が必要ではないか、という指摘をされた。評者も含めて皆がそのとおりで感じていたと思う。ではいったい、どのように発信すればよいのか。

パネルでは、留学された方々の生々しい経験がとても印象的だった。よい刺激を与えてくれる催しだったと思う。しかし、全体としては、そちらの方に焦点があたりすぎて、パネル全体としての深まりは見出せなかった。これは企画をたてられた1人である今田健太郎氏も後で指摘しておられたことだが、せっかく「発信（教えるにいった）側」「受信（学んだ）側」という逆の立場を並べたのに、そのことによる深まり、あたらしい視点の誕生がなかったのである。思うに、教える行為は、学ぶことへの最短距離である。交通の発達で時間差がなくなるとますますそうなってくるだろう。そういった視点などを突破口にしつつ、21世紀の、北米や東アジアを含んだエリアの民族音楽学の発展の仕方について、今後も考えていくべきではないだろうか。

有意義な会を企画してくださった委員の皆さん、そしてパネルの方々に感謝したい。最後に、企画担当者らのおかげで、飲み会も大いに盛り上がっていたことを付け加え、報告を終わる。

(藤田隆則 記)

◆◇◆ 研究発表申し込みについて ◆◇◆

西日本支部定例研究会の研究発表申し込みは、下記までご連絡ください。

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付
電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503
E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

◇◆◇ 入会申し込み・住所変更について ◇◆◇

入会ご希望の方は、80 円切手を同封し、下記の学会本部事務局へ入会案内・申し込み用紙を
ご請求ください。入会申し込みは、ホームページからもダウンロードできます。
会員の住所変更等についても本部事務局へお知らせください。

社団法人 東洋音楽学会

事務所 〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号室

電話 (03)3832-5152 ファクシミリ (03) 3832-5152

学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/>

支部だより 第 60 号

発行：(社) 東洋音楽学会西日本支部 編集担当：奥中康人、谷正人

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付

電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503

E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp